

ベ平連運動の時代から現在へ

大野 光明

(大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教)

関谷 滋

(元ジャテック (JATEC = 反戦脱走米兵援助日本技術委員会)・ベ平連 (「ベトナムに平和を！」市民連合) 活動家)

本稿は立命館大学国際平和ミュージアムでの企画展「ピース☆スタイル」(2014年10月21日～同年12月14日)にあわせて、同年11月15日に立命館大学で開催された『イントレピッドの4人』(ベ平連製作、1967年)の上映会での大野光明と関谷滋によるトークの記録である。

激しさを増すベトナム戦争に対する反戦運動が世界中に広がっていった1967年、ベ平連(「ベトナムに平和を！」市民連合)は、ベトナム・トンキン湾での作戦に出港すべく、横須賀で補給していた米軍空母イントレピッド号からの脱走兵を匿い、国外脱出を援助した。その際、ベ平連によって製作されたのが、脱走兵4人による脱走の意志や理由についての発言やベ平連の活動家4人との質疑応答などを記録した映画『イントレピッドの4人』であった。

上映会では、映画上映のあと、加國尚志・国際平和ミュージアム副館長を聞き手として、大野と関谷による映画の解説、ベ平連の運動スタイルの特徴と今日的意義、ベトナム反戦運動の時代から現在をどのようにとらえるのか、などについてのディスカッションが行なわれた。

映画『イントレピッドの4人』をめぐって

■加國：まずはこの映画の内容や製作の経緯などについて解説をいただけませんか。

■関谷：映画が撮影されたのは1967年10月31日の夜から11月1日の朝にかけてです。ベ平連に米軍脱走兵4人¹⁾がやってきたのは10月28日の夜。映像に登場している4人の日本人——小田実²⁾、開高健³⁾、鶴見俊輔⁴⁾、日高六郎⁵⁾——はとても硬い顔をしています。この段階では、アメリカの脱走兵を援助すると日本人はどんな罪に問われるのかということについて正確な認識はできていなかったときです。このすぐあとに弁護士に聞いて、日米地位協定によって、米兵は日本の

出入国管理の適用外にあるので、出入国に関して米兵が何をしようと日本の法律に触れることはない、したがって日本人がそれを援助しても一切おかまいなしという、植民地的法律のおかげで、日本人は米兵の「密出国」に関与しても日本の法律に何ら触れないという状態であることが分かりました。そして米兵の米軍からの脱走は元々日本の法体制の枠の外ですから、それが日本で行われたとしても日本の刑罰の対象ではありません。ただ、日本の警察は米軍から要請を受ければ、米軍脱走兵を逮捕して米軍に引き渡します。その状態は今も変わりません。米軍が駐留している世界各国で、アメリカはその国々とほぼ同じ内容の地位協定を結んでいると思います。

自分たちの身がどうなるのかということと同時に、もう一つ、気になることがありました。「脱走」とか「脱走兵」という言葉を、これ以前に日本人が聞いたのは1945年以前のことだったと思います。その頃の「脱走」とか「脱走兵」は非常に重大なインパクトを持った言葉でありました。ただ刑罰の対象になるというだけでなく、社会的に抹殺されるというような恐怖感をともなった言葉だったと思います。映画に登場する日本人4人は、戦争体験のおありの人たちですから、脱走を助けるということはどういう社会的なインパクトを与えるのか、どういう反応があるのかということについては、かなり厳しい覚悟をしながら、この映画に臨んだという状況で、ああいう非常に緊迫した表情になっているということです。

このときベ平連という運動はまだそれほど大きくなっていませんでした。この事件によって全国的に知られるようになりました。このときはみんな、これでベ平連は潰されるかもしれないという覚悟をして、腹をくくっていたということを聞いています。私はこの時、直接彼ら脱走兵に会っていませんが、彼らを匿っていた学生から「脱走兵がいるんだけど、なんとかしてもらえないか」という電話が10月28日の昼過ぎにベ

平連の事務所にかかってきて、事務局長の吉川勇一さんがその電話を取られたんです。その時、私は吉川さんの隣で事務を執っておりましたから、どういうやりとりがあったのか、そのときの空気はよく覚えています。

エピソードですけれども、映画のカメラワークは非常に安定していると思います。この映画のプロデューサーは本職の人でした。ベ平連の初代事務局長の久保圭之介さんといって、覚えておられる方も多いと思いますが、『祇園祭』という映画⁶⁾を製作したプロデューサーです。カメラもテレビ局の現役のカメラマンが、テレビ局のカメラで撮影していますので、プロが撮った映像で、音声は多少きつくなっていますが、カメラワークは安定していると思います。タイトルバックは包装紙をくしゃくしゃとまるめてのぼして、そこに吉川さんが字を書いたということなんです。

撮影のあと、11月11日に、横浜からナホトカに向けたソ連のバイカル号という客船で4人は日本を離れるわけです。ナホトカに着いた時点で、11月13日にベ平連が記者会見を開きまして、そのときに初めて公開された映画がこの映画です。記者会見の席上で上映されています。その翌日の新聞報道がどんなものであったのか、少しご覧いただければと思います。この写真は朝日新聞とサンケイ（当時）新聞ですね（写真1）。ご覧のように新聞各紙はかなり大きな紙面を使い、センセーショナルに報道しています。その一つの原因は、ベ平連はこの4人の脱走を支援していると発表しましたが、彼らが今いったどこにいるのかについては一切触れていなかったんですね。だから、どこにいるんだというミステリーめいた興味もあって大きな扱いを受けたという面もあったかと思います。新聞はそれぞれこれだけの大きさで記事を書いています。この報道はしばらく続きます。記者会見から5日ほど経って、モスクワのテレビ局が、脱走米兵はモスクワにいることを伝えたので、行方探しは一段落したわけですけれども、それまで連日、大きな報道が続きました。

映画のなかで鶴見俊輔さんが、脱走した4人は、ベ平連に来る前も、いろいろな人の手に渡って、最終的にベ平連にやってきたという話をしていました。英語がそれほど達者でない人たちが多かったということもあってのことだろうと思いますが、4人はあまり大した話をしていませんでした。ベ平連にやってくるまでのあいだ彼らを手助けしていた人たちは、脱走の記者会見のあとでは、ベ平連が彼らを「反戦」脱走兵に仕立て上げて宣伝に利用したと言うこともあったくらい

でした。日本語のアフレコがあって英語の方が聞き取りにくかったと思いますが、本人たちがちゃんと英語で文章を書き、日本人がタイプをして、4人が署名をしたものがこのように残っております（写真2）⁷⁾。この写真は4人のジョイント・ステートメントですが、4人はそれぞれ個人の声明も書いています。映画については以上のような経緯で撮影され、上映されました。

■加國：当時、関わられた方だからこそのお話が伺えたと思います。次に、大野さん、ご自身は1979年生まれですから、あとからこの映画をご覧になったわけですが、どのように思われましたか。

■大野：大野光明です。私は当時を生きていない人間ですし、当時を生きていた方々を前にお話しするものも若干気が引けますが、よろしくお願い致します。

この映画を初めて観たとき、古くないなという印象を持ちました。今の日本社会や世界の状況のなかで、彼ら脱走兵が呼びかけていたことは非常にアクチュアルなものであるし、自分にも向けられているものでは



写真1

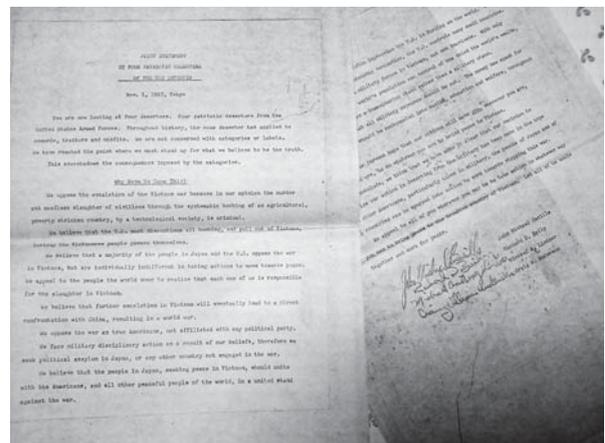


写真2

ないかと思いました。一番印象的であったのは、最後のシーンで出てくる「これは終りではなく始まりである」というフレーズです。この映画を撮っていた人たちや映像のなかに並んでいる脱走兵とベ平連の人たちは、米兵のなかから戦争反対の意思表示をする人たちがこれから出てくるだろう、そしてそれを支援する人々をもっと増やさなければならない、と考えていたと思います。脱走兵援助を一つのきっかけとして、ベトナム戦争から自らを切断する活動、つまり戦争を止める活動がさらに広がっていくだろう、広がっていかねばならない、という思いがあったのだと思います。そして、そのとおりに活動は様々な形で展開されるわけです。その意味で「これは終りではなく始まり」であったのです。

しかし、私が古くない映画だと感じたのは、あのときに問われたこと、脱走兵が提起したことは今も問われていると思うからです。あの時代に、たとえベトナム戦争が終わったからといって「終り」にできないような問題が今に続いているのではないかと考えます。この点について、のちに議論できればと思います。

ベ平連運動——新しいスタイルの市民運動

■加國：ベ平連とはどのような運動であったのか、関谷さんからお話だけできないでしょうか。

■関谷：ベ平連の原則というのは、自分がやりたいことを呼びかけて、賛同者を募って、その人たちと一緒にやる、そして、人のやっていることにけちをつけない、やりたくなければ参加しなくてかまわない、ということですね。大原則として、アメリカのベトナム戦争に反対する、ということがありますけれど、それさえ賛同してもらえればどこで誰が「ベ平連」を名乗って活動しようと構わないということで、どんどん広がっていったという経過があります。

ベ平連の母体の一つとなったのは60年安保のときに発足した「声なき声の会」⁸⁾でした。当時の岸首相が「声なき声にも耳を傾けなければならない」と述べたのに応えて、「声なき声の会」というのをつくって安保に反対した人たちがいて、規模はそれほど大きくはないのですが、60年安保闘争以降、綿々と今に至るまで続いています。そのリーダーは小林トミさん、立教大学におられた政治学者の高島通敏さんや鶴見俊輔さんたちで、その人たちが、1965年2月にアメリカが北ベトナムを爆撃し始めた際、これはけしからんじゃないか考えるわけですが、抗議するであろうと思われ

た有力な団体、たとえば日本共産党や日本社会党、総評などは反応が鈍かったわけです。運動スローガンの一つに加えて掲げることはやったであろうと思いますが、それを主題にした反対運動はほとんど起きてこなかったという状況がありました。そこで、鶴見さんや高島さんたちが何とかしなければいけないんじゃないかということで小田実さんをお呼び出して1965年4月24日に東京でデモが行なわれました。これがベ平連のはじまりになりました。

京都でも1965年の5月には集会とデモが行なわれ、ベ平連ができていきます⁹⁾。たくさんの方が誤解されているかもしれませんが、鶴見俊輔さんは当時から京都でお住まいでしたし、ベ平連で名前が挙がることも多かったので、鶴見さんが京都ベ平連を代表していたと思われている方が多いのですが、京都ベ平連は最初から解散まで京都大学人文研の飯沼二郎さんが代表を務められていました。鶴見さんは京都ベ平連にほとんど関わっていないんです。鶴見さんは、頼まれて話をするということはもちろんありましたが、当時同志社大学に在籍し、研究室もお持ちでしたので、学生のメンバーなどがよくその研究室を使わせてもらうということも日常的にあったんですけど、京都ベ平連からすれば代表はあくまで飯沼さんであり、鶴見さんは「東京ベ平連の方」ということでした。

私は1968年4月に立命館大学に入り、東京から京都に来たんですが、その少し前から東京で脱走兵援助のジャテック¹⁰⁾の活動に関わるようになっていました。当時京都で脱走兵援助の活動をやっていたのは鶴見さんご夫妻だけでした。鶴見さんがご自分のおつきあいの範囲で誰かに「脱走兵を泊めてよ」という形で動いてたということだけでした。4月に私が京都に来まして、鶴見さんとは顔見知りでしたのでお会いしに行った時、「京都では顔も知られていないし、脱走兵援助の活動をするには都合が良い」と言われ、鶴見さんは当時、いわば手足を持っていない状態でしたので、私が使い走りをもっぱら担当するようになったということになります。

■加國：今回の展示のテーマはベ平連です。戦後、市民運動というものが生まれ発展していくなかで、ベ平連はかなり独自のスタイルを持っているなど感じます。企画展のタイトルを「ピース☆スタイル」としたのも、ベ平連のスタイルが新しいだけでなく、大野さんが先ほど仰ったように、そのスタイルが今にもつながらるものと考えたからです。ベ平連によって新しいスタイルが始まったと思うのですが、その点は当時、意

識的に取り組んでおられたのでしょうか。

■関谷：さきほども述べたように、「声なき声の会」がまずモデルになっていたと思います。「何月何日に集まってどこどこでデモをしましょう」と呼びかけて、そこに集まった人たちが、時間になったらそこを出発する。何人になろうとそれは構わない。だから、少ないときは人数が一桁のときだってもちろんあります。多いときは200人を超えることもあったわけです。そういう運動をずっと続けている。このような「声なき声の会」の活動のありようが一つの下敷きになっていて、ベ平連のモデルになったのであろうと思います。「今度の集会には何人集めないといけない」というノルマは一切なかった。来た人たちだけでやろう。たとえ一人であろうと二人であろうとそれは構わない。「自分一人でもやる」というのがベ平連のやり方で、言い出したものは言うだけでなく率先してやる。「言いだしっぺ」の原則ですね。やると言い出した人に賛成する人が集まってやる。あまり賛成できないなと思ったところには参加しないけれど、やめろとは言わない。そのようなスタイルでベ平連は最後までやっていけたので、今につながるスタイルをつくれたのかなと思います。

また、活動のなかから派生していろいろなスタイルが生まれて、たとえばフォークゲリラもベ平連のなかから生まれました。フォークゲリラはもともと関西でスタートしました。文化的、芸術的な形態での参加というはしりでもあったのかなと思います。

■加國：ベ平連はかなりゲリラ的といいますか、特定の組織のなかでやるのではなく、自主的に参加する運動スタイルであったというわけですね。この点について、大野さんは、現在の市民運動にかかわるなかでどうお考えですか。

■大野：私は研究をしながら、現在進行形の社会運動、たとえば沖縄の基地問題であったり、京都府京丹後市での米軍基地建設の問題についての社会運動にかかわっています。ベ平連のスタイルや残された言葉や思想というのは、今も参考になるなと受け止めています。

ベ平連は運動のスローガン——「ベトナムに平和を！」「ベトナムはベトナム人の手に！」「日本政府はベトナム戦争に協力するな！」——をかかっていたわけですが、そのスローガンをシュプレヒコールのように唱えるだけにとどまらず、具体的な運動課題を設定していました。ベトナム戦争を自分とはかかわりのない問題としてとらえ切絶せずに、自分自身が巻き込まれているもの、自分もその歯車になっているものと

して対象化していたと思います。たとえば自分の職場がどのように軍需産業とかかかわっているのか、この街の空気がどのように戦争を支えてしまっているのか、この大学の講座では戦争反対の声をあげきれていないのではないかなど、自分のおかれている具体的な現場で変革の対象を見定めていくということがあったのだと思います。しかも、具体的な運動課題を、個人の自発性によって対象化していく強みがあり、上から言われたからやるのではない、自分はこうしたいのだ、自分自身をこのように問うのだという点が魅力的であると思います。

私の専門である沖縄の戦後社会運動史研究からさらに考えてみたいと思います。私は沖縄でのベ平連運動の展開を調査しています。1969年から70年代初頭、沖縄では米軍基地の中から反戦運動を始めた黒人兵と、その外で反戦・反基地運動に取り組んでいた「沖縄ヤングベ平連」を含む沖縄の人たち、そして両者のあいだをとりもとうとしたアメリカ人の反戦活動家が交流を始め、反戦運動や反基地運動に共同で取り組んでいたことが明らかになってきました¹¹⁾。このような交流がなされていたこと自体が、日本「復帰」前の米軍統治下にあった沖縄ではとても重要なことです。沖縄側の運動は反米＝反基地闘争という性格が強いわけですが、沖縄でのベ平連運動は、米兵と沖縄の人々との出会い方を変えていく契機をつくっていたのです。基地・軍隊のなかにも抑圧された兵士がおり、こんな戦争にかかわりたくない、こんな基地で働きたくないという思いを持っている。それをフェンスのこちら側、沖縄の人々の側がくみとり、沖縄社会のなかの「基地はいらない」という声と紡ぎあわせていく。たとえばこのポスターですが（写真3¹²⁾）、アメリカの反戦活動家が米兵にむけて、沖縄の人々の全軍労ストライキへの支持と支援を呼びかけたものです。沖縄の基地撤去、沖縄の基地労働者の首切り反対、そして抑圧された米兵の解放も同時に呼びかけています。軍隊によるフェンスのこちらの抑圧とあちらの抑圧を、個人のレベルであれば重ねあわせて考えることができる。もしも、国民という単位で考えるならば、アメリカ人と沖縄人の加害と被害の二項対立図式に囲い込まれてしまうけれど、個人のレベルであればそれぞれが基地・軍隊からの解放を求めあえる。そのような実践が沖縄でのベ平連運動のなかで試みられていました。

反基地運動はどうしても「アメリカは帰れ」や「ヤンキーゴーホーム」というスタイルになるわけですが、しかし、ベ平連の運動は、基地のなかで働く人々のお

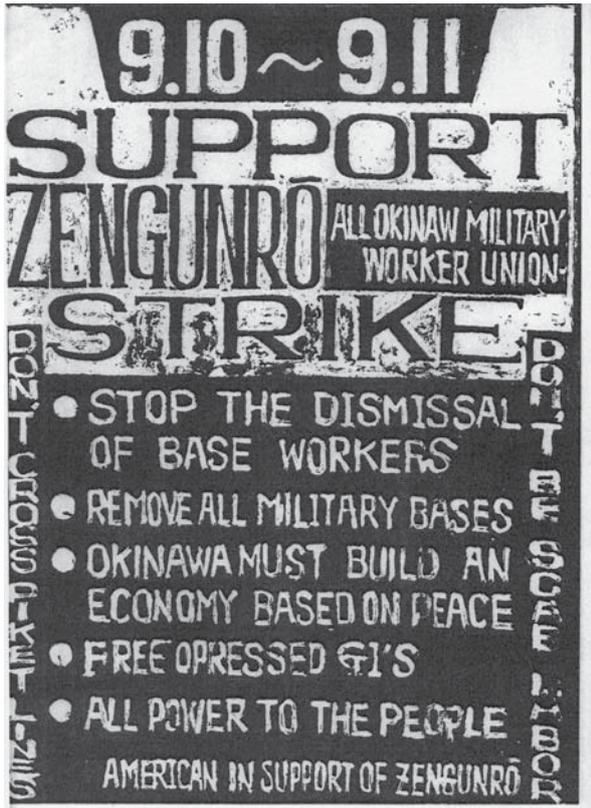


写真3

かれた状況を読み解き、基地・軍隊による暴力を具体的な社会関係において解いていくという点に特徴があり、いまだに重要な思想を提示していると思います。

京都におけるベ平連運動——地域から戦争を問う

■加國：展示会の準備にあたっては京都ベ平連の方々による座談会を行ない、さまざまな資料もご提供いただきました。ベ平連運動のなかで京都ならではの特色はあったのでしょうか。

■関谷：京都は大学が多く、学生と教員が多かったせいもあり、大人たちの知恵や助けを若い人たちがかなり簡単に得られるという関係がありました。他地域のベ平連と違う状況であったと思います。ちょっと迷ったりしたら相談しながら知恵を拝借したりとかということもありました。集会の際、講師を頼むのに困ったことはあまりなく、声をかければ来て下さる方がたくさんいました。

京都、大阪、兵庫、滋賀、奈良、和歌山にそれぞれベ平連はありました。京都のなかにもほとんどの大学にあったと言ってもいいくらいです。堀川高校など高校にもベ平連がつくられ活動が行なわれていました。

大阪でベ平連が始まったのは少し遅れて、京都のほうが先でした。ベトナム戦争に反対する運動自体は大阪でも同じ頃から始まっており、京都のベ平連とのつきあいもありました。その後、大阪にもベ平連をつくらうという人たちが出てきて、つけた名前が「関西ベ平連」でした。京都に別に相談があったわけでもなくて、京都の人間からすると「大阪だけでやっているのに、なんで関西ベ平連なんや」って、ちょっとむっとしたことがありました。京都と大阪、あんまり仲はよくありませんでした（笑）。

東京では「東京ベ平連」と名乗っていたのではなく、ただ「ベ平連」と言っていたんですけど、あちこちでベ平連ができてくると、「なんで東京だけただのベ平連で、私たちは地域の名前をつけないといけないんだ」といった意見も出てきて、非公式ではありますが「東京ベ平連」という言い方をすることが多くなりました。あるいは、「神楽坂ベ平連」というような事務所のある町名をつける言い方をしたこともあります。神楽坂に住んでいた人がやっていた運動ではないので、その呼び方はあまり正確でなかっただろうと思います（笑）。

ベ平連には、本部・支部という関係はもともとからありませんし、登録制度のようなものもありませんから、東京のベ平連がその存在を知らない地方のグループも少なからずありました。東京と各地域や大学などのベ平連をつなぐ唯一のものは、東京のベ平連が月に1回出していた『ベ平連ニュース』を送っているということでした。「〇〇ベ平連を立ち上げました」という連絡があったりすればその存在は把握できるのですが、個人名で『ベ平連ニュース』を定期購読して、その人が実はベ平連を立ち上げていたとすると、そのベ平連の存在は東京の方では誰も知らないという状況でした。事務局長の吉川さんが、ベ平連がなくなったあとでホームページを立ち上げて、ベ平連を名乗って運動していた人がいれば連絡して下さいと呼びかけをされたのですが、確認できたベ平連の数は今でも毎年ちょっとずつ増えていまして、現在のところ393のベ平連があったということが分かっています。

■加國：当時、立命館大学で学生生活を送るなかでベ平連やジャテックの運動に参加されるというのは、どんな思いだったのでしょうか。

■関谷：私は立命館大学に入学する前から、ベ平連に関わり、ジャテックでの脱走兵援助の活動もし始めていましたので、68年4月に入学する前に、下宿を探しに東京から京都へ来たときに、鶴見さんのご自宅に伺

ったのですが、「夜中に呼び出すこともあるから、なるべく歩いて来れる所にいてください」と言われました(笑)。そして、「脱走兵のことを専門にやってほしいので、あまり集会やデモには顔を出さないようにしてください」と言われました。このような状況にありましたので、大学生にはなりましたが学生運動からは意識的に遠ざかっていたという面がありまして、学生運動には関わりを持たずに過ごしました。特殊なポジションにいたのかなと思います。「大人」の人たち——20歳前後の学生や浪人生は年上の社会人たちをそう呼んでいたのですが——と接する機会が密になる状況で活動していたため、一般的な学生生活とはかなり違った過ごし方をしたのだろうと今になっても思います。

そのことは『となりに脱走兵がいた時代』(思想の科学社、1998年)をまとめるにあたっては、かなり役に立ったと言えます。1968年11月に脱走兵がスパイの潜入によって逮捕されてしまい、東京のジャテックの人々は顔が割れたということで総入れ替えに近い状態になったんです。ジャテックの第一期と第二期では、東京においてはほんの数人しか重なっていないんです。京都ではそれがなかったので、私はジャテックの初期からほとんど最後の段階まで、ずっと中枢部に近いところで走り回って、使い走りをしていたということがあります。だから、ジャテックの運動の概略と流れについてはほぼ全期間をつかんでいた数少ない人間の一人だっただろうと思います。この本をまとめるべきだったと思われる人は他にいないわけではないのですが、当時の活動家だった人たちは働き盛りで仕事をしていましたので「仕事の関係で脱走兵のことで自分の名前を出すのはちょっと具合が悪い」と言う人もいたものですから、私にはそのような事情はなかったので本のとりまとめを担当することになりました。

■加國：ベ平連は、ベトナム戦争というグローバルな問題について、地域に根ざした活動を行っていたと思います。このことの意義をどう考えられるでしょうか。

■大野：米軍基地のない京都で、どのようにベトナム戦争を問うていたのか、私も関谷さんにもう少し伺いたいです。

■関谷：日本は直接兵士をベトナムに送っていることはもちろんなかったのですが、ベトナム戦争で一番儲けたのは日本だというのが定説ですね。韓国は最大時5万人の兵士をベトナムに送りこんで、その人件費はすべてアメリカが負担していました。その韓国が得た利益の数倍のものを、日本は一人の兵士も送らずに獲

得できたと言われています。世界で初めて茶の間に戦争の映像がストレートに流れ込み、非常に残虐な写真や映像が毎日のようにテレビで放送されていた時代です。そのため感情的に「これは酷いな」ということで反戦運動を始めた人は多かったと思うんです。そして運動のなかで戦争における日本の立場や役割がだんだん見えてくる。日本は一人の兵士も送っていないけれど、決してベトナム戦争と無関係ではなく、極めてはっきりした加害者の立場で動いている、うまく立ち回っている立場にあるということに気付いていく。すると自分たちも何とかしないといけないと考えるようになる。心理的にベトナムとの距離が近くなるわけです。そのような変化のなかで基地問題についても気付いていく。目の前に基地があれば分かりやすいですけど、目の前になくてもベトナム戦争における自分たちの立場が分かってくる状況のなかで、京都でも基地問題などに取り組んでいくということだったと思います。

■大野：地理的に「遠い」場所で起こっていることと自らの暮らしや社会のありようがどのようにつながっているのかが、運動の蓄積のなかで豊かに認識されていたのだと思います。

運動を継承する——ベ平連の今日的意義と残した課題

■加國：今日からみて、ベ平連にはどのような意味があるといえるのでしょうか。また、ベ平連の運動を未来へと引き継ぐとしたらどのようなことがいえるのでしょうか。

■大野：ベ平連の時代から現在まで、日米安保体制を中心とした社会のあり方は変わっていないわけですね。そして、ベトナム戦争で終わらずに、日本社会はイラクやアフガニスタンなどでの戦争と変わることなく密接に関わってきたというのが実態でしょう。この映画のなかの「これは終りではなく始まりである」というメッセージは、ベトナム戦争後の日本社会に生きる人々へのアクチュアルな問題提起であるとも思うのです。

一方で現在の日本社会を冷静に見るならば60年代後半から70年代初頭の社会状況と断絶しているとも思います。第一に、政治状況がものすごく悪化してきているという客観的事実があります。これは、たとえば集団的自衛権の行使容認や武器輸出三原則の改悪であったり、この映画でも焦点となっていた憲法をめぐる問題などです。第二に社会運動全体が後退してきたと思

います。3・11以降、変化はみられますが、社会運動への忌避意識や拒否感は根深く広がっているといえるでしょう。

もしもベトナム反戦運動を現在において継承するのであればいろいろなやりかたが必要だと思います。第一に、ベ平連がうまく取り組んだ点だと思いますが、前提や準備がなくても参加できる運動や場をどれだけつくれるかが大切ではないでしょうか。デモや集会でよく見受けられるのは、「私はこの問題について詳しく知らないから、参加するのは失礼なのではないか」、「私のような人間が参加するべきではないのではないか」という発言があります。私はそんな人でも「これはおかしいな」という思いで参加できる運動や場がもっとあっていいんじゃないかと思っています。

第二に、ベ平連のシングルイシューという運動の立て方に目を向けたいです。ベ平連のシングルイシューというのは「ベトナム反戦」にとどまるものではなくて、軍需産業の問題や多国籍企業のアジア進出の問題、公害問題、戦争責任や沖縄の基地問題など、枝葉のようにつながる諸問題へと認識を深めていく豊かさがあったと思います。社会運動が一つの課題だけの取り組みに終わらず、社会の成り立ちの全体を問うものへと深めていく過程が経験されていました。3・11以降の反原発運動をめぐって気になるのはこの点です。「反原発」や「再稼働反対」という言葉の向こう側にどれだけ枝葉のように広がる豊かさを確保できるだろうか。この映画の「これは終りではなく始まりである」という言葉を今日的に拡大解釈するならば、求められている「始まり」とは、このような運動の豊かな広がりや展開の継承でもあるといえるのではないのでしょうか。

展示のなかで、京都ベ平連が三条大橋の下で集まっていた様子がありましたが、今も私たちはあそこに集まっています。今、人々が集まり、座り込み、語らうなかで、この二点がどのように花開いていくのか考えながら実践していきたいと思っています。

■関谷：脱走兵を匿っていた家庭が沢山ありますが、匿ったことが一つのきっかけとなって、その後家庭がうまくいかなくなるということがありました。推測すると、おしなべて、男の人がいいかっこして脱走兵を引き受けた。しかし、多くの場合、男の人は会社に出て家にいないため、家で面倒をみるのは女の人であるわけです。一番しんどい役割を引き受けた奥さんから、あとになって溜めていた不満が爆発したというようなご家庭はいくつかありました。奥さんは非常に断りに

くいんですよね。頭のなかでは脱走兵援助は良い運動だ、良いことだという思いはある。しかし、現実には大変なことを自分が全部引き受けなければいけない。夫は「よろしくたのむよ」の一言だけで何もしてくれない。それをずっと見てきた子どもさんにインタビューをした時「正義を押しつけられると、すごく辛い」、「正義を振りかざさない運動をつくってほしい」、「人間にはいい加減さがあって、そのいい加減さを引き受けながら動く運動であるべきだと思う」というようなことを言われたことがあります。それは今でも通ずるんだと思います。また、やるべきときにはしなければいけないんでしょうけれど、一休みありの運動、休んでもいい、やめても構わない、という形の関係で運動をつくっていかないと辛い思いだけが残るということもあると思います。一朝一夕にうまくいくとは思いませんが、そういうことを心がけながら、やっていったらいいと思います。

今日お配りした資料にハングルの新聞記事¹³⁾があります。私が脱走兵援助についての話を日本以外で初めて依頼された今年（2014年）の9月の韓国での記事です。韓国は男子に対しては国民皆兵制度があり、必ず徴兵に応じて軍務に就かないといけないのですが、徴兵を拒否している人たちもいます。良心的兵役拒否という制度はないため、徴兵に応じないことは刑罰の対象、刑事訴追の対象となります。裁判にかけられ、有罪が確定すると、服役しなければならないそうです。そうすると、一定以上の刑を受けた者は徴兵しないという規定があり、そのことによって徴兵を拒否することです。韓国では履歴書に兵役を終えたかどうかを必ず書くため、また有罪が確定したということは前科になるため、兵役拒否した人々は非常に厳しい人生を送らなければならないのです。それを覚悟して兵役拒否をする人々の団体から呼ばれ、お話をさせていただく機会を得ました。私は韓国においてそのような厳しさのなかで兵役拒否運動が行なわれているということを初めて知りました。

■加國：ベ平連の運動の背景や当時の状況、そして今日的意味について考える場になったと思います。どうもありがとうございました。

以上

【注】

- 1) クレイグ・ウィリアム・アンダーソン（1947年生まれ）、ジョン・マイケル・バリラ（1947年生まれ）、リチャード・D・ベイリー（1948年生まれ）、マイケル・アントニー・リ

- ンドナー (1948年生まれ)。それぞれの生い立ちや脱走の理由については小田実・鈴木道彦・鶴見俊輔編『脱走兵の思想』(太平出版社、1969年)所収の「脱走兵名簿およびその声明」を参照。
- 2) 小田実 (おだ・まこと 1932~2007)。作家。『何でも見てやろう』(河出書房新社、1961年)がベストセラーになる。1965年4月のベ平連発足時から代表。
 - 3) 開高健 (かいこう・けん 1930~1989)。作家。ベ平連世話人。1965年のニューヨークタイムズ紙への反戦広告を提案。
 - 4) 鶴見俊輔 (つるみ・しゅんすけ 1922~)。哲学者。ベ平連世話人。映画撮影時は同志社大学教授。
 - 5) 日高六郎 (ひだか・ろくろう 1917~)。社会学者。映画撮影時は東京大学教授。
 - 6) 『祇園祭』は1968年11月封切、松竹配給。山内鉄也監督。主な出演者は、中村錦之助、岩下志麻、三船敏郎、高倉健、渥美清、美空ひばり。協力を京都府。
 - 7) 日本語訳版については「われわれは何故この挙に出たのか——イントレピッド号の愛国的脱走兵4名による合同声明」(ベトナムに平和を!市民連合編『資料・「ベ平連」運動 上巻』河出書房新社、1974年、262~263頁)を参照。
 - 8) 「声なき声の会」の運動については『復刻版 声なき声のたより 第1巻 1960~1970』、『同 第2巻 1970~1995』(思想の科学社、1996年)、小林トミ『「声なき声」をきけ』(同時代社、2003年)などを参照。また同会Webページ <http://from1960koenakikoe.web.fc2.com/> も参照されたい。
 - 9) 京都ベ平連については機関紙『ベトナム通信』をまとめた『復刻版 ベトナム通信』(不二出版、1990年)を参照。
 - 10) ジャテックの脱走兵援助や反戦米兵支援の運動の詳細については、関谷滋・坂元良江編『となりに脱走兵がいた時代——ジャテック、ある市民運動の記録』(思想の科学社、1998年)、高橋武智『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた……』(作品社、2007年)などを参照。また、大野光明「越境する運動と変容する主体——ジャテックの脱走兵支援運動・米軍解体運動を中心に」『Core Ethics』4号(2008年)も参照されたい。
 - 11) 大野光明『沖縄闘争の時代1960/70』(人文書院、2014年)、大野光明『「復帰」の向こう側を幻視する』小野沢稔彦・中村葉子・安井喜雄編『燃ゆる海峡』(インパクト出版会、2013年)を参照。
 - 12) ベトナムに平和を!市民連合『ヤン・イクスと共に』(1971年2月15日発行の冊子)より。
 - 13) 「占領者、米軍も一人の人間、ベトナム戦争の犠牲者」(『ハングョレ』紙 2014年9月30日)